



試し読み【死して概念になり世界の平穏を見届けた先で死の前へと生還す】※R18

意馬心猿

【登場人物】

主人公…ファムア♀

薄紫の髪、薄紫の瞳。過去は人の目が見れない地味な子だった。猫背気味な巨乳なので着ぶくれしている。世界が突如現れた魔物によって混乱した際、食糧難にて異種族のリイチと共に爪弾きにされ魔物の餌になり魂が抜けてしまいリイチに取憑いてしまう。しかし世界が穏やかさを取り戻した後、天に召されるかと思えば何故か魂が、あの時代に戻っていた。

一人称、私。

お相手…リイチ♂

黒髪、黒瞳、耳長の褐色。学園の特待生、優秀な子だが見た目の違いで異端として酷く嫌われており、ファムアと共に爪弾きに合い彼女が死んでしまう。が、魂となったファムアに助けられ世界の平和を見届けて老衰し念願の魂だけを過

去に生還させる事に成功する。

少々、狂人。

一人称、僕。

モブ…タロス♂

金髪、碧眼、薄茶色サングラス。

新しい時で出会った四年の気の良い先輩。

モブ…イシユア♀

桃色髪、桃色の瞳。気の強い美少女。

青春癩癪を起すが当主になれる器を持っている。

要約すると、お互いが好きすぎるバカツプルな話。

【死して概念になり世界の平穩を見届けた先で死の前へと生

還す 前編・R15G】

魂という概念になり私は色んな無機物に憑依した。生物に関してはリイチにしか触れられなかったが、それなりに楽しい満足のいく、無味な一生の後に知れた概念だったと思う。

今日は油性ペンに憑依して年老いた彼の手の甲に絵や文字を書いていく。リイチのお陰で世界は平穩を取り戻したと私は思っている。リイチは最初の力不

足だった頃の過程で私が死んだ事を悔いているようで罪の意識で謝罪を繰り返すので私は、お願い事をした。私が死ぬ前に恋愛がしたかったからフリをしてほしいと言うと魂だけの憑依物体と恋仲になってくれた。

マネキンに入り込んで、デートをしてみて満足したので、もう大丈夫だと言えば断られ。何故だか分からないが、そのまま彼は年老いても私を側に置いてくれている。こんな概念と謎めいた結婚式まで上げたのだから何とも律儀な人だ。

しかし、そんな愛しい人とも今日で、お別れである。

彼の鼓動は、もう直ぐ終わるだろう。

「……僕の愛しい人、次は必ず君を抱きしめるよ」

そう呟いて彼は穏やかな表情で瞼を閉じた。私は相合傘を書き終わった油性ペンから魂を抜くと彼の身体に重なり消える時を待つ。

生きている内は苦しい事ばかりで嫌な人生だったけれど死してから素晴らし

い記憶が持てた。とても、とても満足している。

ありがとう。

私の愛しい人。

一、【死の前へと生還す】

「異端と役立たずは要らないだろ」

「そうね」

「二人分減れば少しはマシかな」

「デブは二倍食うし三人分じゃね？」

「異端が居なくなれば少しは飯の味も良くなるしな」

笑い声。

喧噪、空間、視界、知人だった者達。

私は消えた筈。

何故だろうか。

概念にも走馬灯というモノがあると云うのか。

ぼんやりと自分の手の平を見る。白く日に当たらない不健康な手の平だ。

「おいっ！　ぼーっとしてんじやねえぞデブ、てめーの話してんだろうが」

ドツと音がして横腹を蹴られ床に倒れる。

痛い。

「うそ……痛い……？」

驚いた。衝撃が私の胸の内側を駆け回る。一つの教室内で行われた会議という名の生贄排出。私は一応会議に参加になっているが、この時、リイチは一人で、中央広場に残る残党の魔物と戦っていた筈だ。世界の変化が起きた時、彼は共に教室に入る事さえ許されなかった。

「リイチ……」

私は痛む、お腹を押さえながら立ち上がる。

早くリイチに言葉が言えなくなる前に伝えなければ。

「おい？　なんだ、お前、どこ行く気だ」

気が急いでいれば髪を束で引つ張られ立ち上がり歩き出した身体が傾く。

「煩いな！　この後、ブラックウルフが来て大変な事になるんだから！　追い出すんなら、もう、ほつといって！」

生前、私を虐め続けていた彼らを怒鳴りつけ手の力が緩んだので、そのまま急いで教室を後にする。

「何だアイツ」

「調子乗り過ぎでしょ……」

「気でも狂ったか」

「馬鹿の無駄知恵だろ」

「くそ腹立つ」

出て行く時に、ぼそぼそと罵りが聞こえたが、もう、どうだっていい。それ

よりも、リイチに伝えなければ。ブラックウルフは仲間を呼ぶ為、先に喉を潰す方が良い。今なら実験室には薬品が豊富だ。その材料で喉を詰まらせる薬品を作る方法を伝えよう。そうだ。後に向かう東病院には薬品は残って無い上、魔蛾の巣窟なので行つてはいけない。それに光の組合は騙っていたので信じてはいけないし、リイチは真っ直ぐな人なので頼まれごとは聞いてしまうし基本信じてしまうし、それを完全に止める事は無理でも助言を先にしておくだけでも違うだろう。また概念になってから筆記で伝える方法はあるが今は、ブラックウルフで、リイチが最初の怪我をするのを、なんとかしたい。最初の頃の再生能力は遅かった記憶だし、あれさえ無ければ彼の苦勞が格段に減るはず。

三階から校内、突き抜けの中央広場を目指す。途中、取った消火器を持って扉を抜け入り込んだ。

「え……」

私は啞然とする。

何故かゴブリンやブラックウルフも倒れ、その中央で木刀を手にしているリイチが刃の部分に付着した血を一振りして弾き飛ばしていた。

「リイチ……？」

何故だか分からないが、その後ろ姿は長年連れ添った頼もしい背中に見える。下の中央広場から顔を上げた、リイチは突き抜けの上、三階の私と視線が合うと走り出す。タンタンタンつと木刀を上手く引っ掛けて三階まで直接やってくる。すると私の目の前に降り立った。

「良かった……記憶の少し前の軸に移動したら急な場面に手が離せなくてね」
彼が一步、一步近づいてくる。

「……リイチなの？」

「ああ、君のリイチだよ」

そう言って笑顔で彼は私を両腕で抱きしめてくれた。

ひゅう、ひゅうつと喉から言葉にならない音が漏れ涙が溢れる。

「うう、ううつ、り、い……ううつ！」

リイチに私も両腕を回して抱きしめ返す。

「はあ……可愛い声……それに柔らかい……」

感動な場面。涙が止まらないし胸がいつぱいだ。温かい、リイチの体温を感じる。

「ファムアの、おっぱいが大きい事は気づいてたけれど、こんなに柔らかいんだな……」

まって。

「君が生処理器具や愛玩人形に憑依してくれて営みはしていたけど、やっぱり温かな肉体があるって違うね……ああ、でも、あれは勿論、気持ち良かったし満たされは」

「まって、リイチ」

涙が引つ込んで言葉を返す。

「うん、ファムア。そうだね場所を移動しようか確か寮以外に寢床がある部屋は、この学園にも幾つか存在してたよね。そこに行こう」

「いいえ、リイチ」

「ん？」

「今は命を優先しなければならぬ時だし、また今度にしましょう」

「……え」

リイチが驚いた表情をする。黒い瞳に水分が滲む。

「んんんっ……と、とりあえず……この後、無理やり追い出される場面は無くなったので出来れば寮に置いてある荷物だけ取りに行つて学園を出ましようか」
「うん……学園や寮以外で寢床が安定する場所となると……」

リイチが悩みながら私と手を繋ぎ歩き出す。自然と絡められた指が、無機物憑依の時に感じなかった体温と不思議な肌の触れ合いを感じて緊張した。

——……わ、私達は夫婦、夫婦なの……よ、夜の営みは普通な筈よね！で、でも、今の私は好ましいと思えないし、お腹出てるのバレる！皆から何時もデブって言われてたし……せめて、もう少し体型を整えるまで待つてもらわなきゃ……

「いつそ追い出そうとする彼らを追い出すべきじゃないかな……今は、ブラツクウルフの群れが来ないわけだし……僕自身、知識の経験はあるけれど、まだ、この身体は育ちきつてはないからね……ああ……でも、そんなお互いを確かめ合うのも楽しいだろうな……ね？ ファムア」

「え？ ええ」

全く話を聞いていなかった。

それにしても若がりし頃の笑顔のリイチが見るのは嬉しい。確か、この頃のリイチは笑顔なんて存在しない無表情で必死に生きていたように思う。元々、

強く有能な人であつたけれど多勢に無勢な心無い言葉や魔物の止めどない攻撃に心も身も辟易して目が死んでいたと思う。

「良かった。ちよつと、この教室で待つててくれるかな？ 直ぐに用事を終わらせてくるから」

「リイチ？」

リイチが手を離して何処かへ行こうとするので両手で腕にしがみつく。

「そ、そんな離れがたいって？ ……はぁ好き」

「え……わ、私も、あなたを愛してるわ」

唐突に好意を言われたので前に筆談でしか出来なかった言葉を返す。

「ああ……ああっ！ 愛してる！ 僕もファムアを愛してる!!」

叫ぶ、リイチに抱きしめられて唇が私の口に触れた。

ちゅ、ちゅう、ちゅっ。

柔らかい音が繰り返し聴こえる。その音の発生源の触れ合い。唇は外に露出した内側の皮膚故か環境に左右されやすい。お互いを認識して落ち着いた今だが緊張状態の過去の私達は疲れを感じていたのだろう。お互い少し力サついて固めだ。

「……っ、り、リイチ……今は駄目っ」

リイチに教室の机に座らされて抱き締められながらマネキンや専用の愛玩人形の時の様に愛撫される感触の違いを感じながら羞恥に両手で彼の胸を押す。

「……ファムア？」

「そ、その、お風呂入れてなくて……あ、歯磨きだけは、お昼用に常備してるのでしたのよ。で、でも……今は唇も力サついて……だから、えつと……私、ちゃんと身綺麗になつてから、あなたとキスがしたい」

「……く、う、ううっ」

リイチは小さく呻くと美しい黒い瞳から涙をポロリと溢した。

「え、り、リイチ」

「なぜ、何故だ。何故、君はこんなにも愛おしいんだ……ああ、あの初デートの時も、表情は変わらない筈なのに、あまりにも愛らしくて僕は、こんな破壊力のある攻撃は初めてだと思ったものだけだ」

「え、え……？」

「過去、僕らにとつての未来の今、新たに更新していく君の愛らしさには脱帽だ」

「そ、その、あ、ありがとう……？」

「ああ！ その表情も可愛いっ！」

「ひえ」

リイチって最初から、こんなにテンションの高い人だっただろうか。戦闘時は少々違うけれど、どこか大人びて内に何かを秘める彼の助けになりたいと常々、

思っていた。そんな彼の内心を暴露され、それが好意的なのが知れて正直、嬉しい。嬉しいけれど恥ずかしい。どうしたら良いの。

「ふふ。ファムアが喋ってる……表情が変わって可愛すぎるし香りがするのも嬉しいし柔らかくて温かくて……」

「んうつ」

リイチが私を抱き締めている腕をクロスさせて、お尻を揉んでくる。お腹よりはマシだけど、そっちも、もう少し引き締まってから披露したかったというか。あと、昨日、寮には戻れず、お風呂入れてないので嗅がないで欲しい。確か、あの時トイレで常備の汗ふきシートを使って身はマシにはしたけれど髪は洗えてないし。

「嗅ぐの、やめ」

「でも……確かに、ファムアの初めてを、ここで散らすのは嫌だな。先ずは整えた部屋……寝台を……」

いけない振り出しに戻っている気がする。

「り、リイチ！ 私、あなたの良いところ覚えてるから立つちやったの手と口でするわ！」

「ええ!?」

リイチが目を見開いて驚いた後、カツと頬や耳を染めたのを見て、私も身がグーンと朱く染まっていく。無機物に憑依していた時は、こんなに身が熱くなつて汗が滲むなんて無かったのに。

「……あ、い、いいの……?」

「う、うん。もちろん」

ちよつと視線を逸らしつつ太股に感じる彼の布越しの固い部分を脚で撫でる。

「……んっ」

リイチの身が熱くなっていくのを感じながら両手を伸ばし彼のズボンのチャックを少しずつ下ろしていく。見えたのは常備、売店に売っている黒い男性用下

着だ。確か運動部の人達が定期的に買っていた。リイチは差別にて肩身が狭く運動部に所属できていないけれど剣技は自主的に磨いていたので、よく汗をかいていたなっと思い出が蘇る。

「……ファムア」

リイチが私の背中を撫でながら顎を肩に乗せ息をし眩きと温かい呼吸が私の耳を刺激して身が、ゾクリと震えた。リイチの膨らんだ下着の先っぽは湿っている。指先平で撫でてみれば少し粘着く感触がした。

「っ……」

ゴクリと唾を飲み込み排泄をする為にある切れ込み横から指を入れ進むと竿に触れ熱気を感じる。そのまま竿を伝ってカリの部分に辿り着くと指平で撫で、ぐっと内側から取り出した。

「……は」

リイチが私の首筋に唇を押し当てて軽く吸い始める。マネキンや愛玩人形の

時も、そうする癖があつたなつと懐かしさを思い出しながら手を動かす。マネキンの時は何時も動かしにくく愛玩人形になつてからは改良が重ねられたが人として触るのは初めてで、とても動きやすく内心、驚く。過去に生きていた時は人に怯え固く重々しい脂肪の塊だと思つていた手は全く違う。

にち、にち。

彼の先つぽから滲む透明な液体を手の平を丸めて撫でり皮ごと、ぐぬりと下ろしていく。リイチの大事な場所を意識して見たのは確か彼に取憑いて四季が巡った頃だつたらうか。

戦いで崩れた街が、ぱらぱらと落ちる白い雪で埋まり、その日は建物の一角に籠つて、じつとしていた。そんな静かな彼が吐息を溢し徐に毛布の中で手を動かし始め。そんな毛布に入り込んでいた私は薄暗い中の、ソレを見つめた。

輪郭が膨らみ手の内側で固くなり、ぐにぐにと皮が上下に移動する。その光景は私にとって衝撃的で毛布に飛び散った液体に魂ながらの高揚感が生まれた。まだ、その頃のリーチは常々、私が彼の側の何かに憑依しているとは知らなかったように気が向いたら要る何かぐらいに思っていたようだ。

「っ……ふぁ、むぁ……で、る……っ」

懐かしみながら手を動かしていれば、リーチが私を抱きしめる腕に力を入れて、ぶるりと震えた。温かな液体が私の手の内側に跳び、どろりと垂れる。

「ちゃんと出せたね、リーチ」

空いている片手で、リーチの背中を撫でながらそう言えば、彼は無言で私の肩を吸い上げた。少しの痛みの後に温かい湿気った弾力が皮膚を撫で、リーチの舌の感触は私を不思議な気分させる。リーチの身が上がり背の高い彼が私を潤んだ瞳で見つめ。私は汗の滲む彼の額を親指の平で軽く拭い机から腰を下ろす。

「さあ、リイチ。次は、あなたが腰かけて」

「……うん」

濡れていない片手で彼の手を掴み机ではなく椅子の方にリイチを座らせる。長い緩やかに曲がる教室内の一つの椅子の縁で私は敷布の上に両膝を乗せ彼の開いた膝の間に身を入れた。顔を下げると自分の髪が横に垂れてくる。目覚めてから少々、色々あつて三つ編み一つだった髪は髪留めから漏れてしまったようだ。

「リイチ、私の髪を結び直してくれる？」

「ん……ファムアの髪は柔らかいね」

濡れていない片手で取った簡素な髪留めをリイチに渡すと彼は両手で私の頭部に触れて髪に指を通す。頭皮を触られる心地良さを感じながら私は彼の出した液体で、もう一度、固いままのモノを握り撫でる。

「……っ、今度、君に似合う髪留めを手に入れよう」

「ふふ。楽しみ」

雪の日に自慰をしてから、リイチは静かな暇な瞬間になると三、四度は吐き出すのが日課になっていた。私がマネキンや愛玩人形、初期の頃は愛玩道具に憑依してからは自慰は無くなり、そこから好きな時に堂々と致すようになったので数日に一回が毎日に変わり、そこからの数はよく覚えていない。年代が上がるとうと一日一回は、していたと思う。夫婦になって、しなかったのは最後の死に際の数日ぐらいだ。

「ああ……ファムアが僕のを……うあ……んっ」

舌を伸ばし彼の立ち上がったままの肉棒の先っぽを舐める。少しの苦みを感じた。口付けをした時も久々な生物的な香りに驚いたが、こちらの明確な味は長年忘れていた味覚で胸が高鳴る。瞼を瞑り大きく口を開けて形と味を確かめていく。口内に感じる大きな窪み、つるりとした所、塗り付けた精液の苦みとは違う新しく滲み出たしよっぱさ。舌平全体で撫で味わう。

ぬち、ぬちゅ、ちゅる。

「……ファムアの口の中、す、す………いつ」

私の口内でリイチの肉棒が自ら反応を示す。舌を丁寧に動かし暴れる肉棒を噛まないように最大限、気を付けながら頬裏と舌で包む。リイチの両手が震えながら私の頭や首の甲を撫でた。好感触に今度は反対側の頬裏で刺激する。憑依の頃の知識だけはある生身の身体でするのは初めてだったが悪くないようだ。ホツとしながら舌の疲れから正位置にして舌と唇を使って全体を吸いながら舐め上げる。

「……ファムア、ふあむ、んあ、ああ………っ！」

力が入ったのかリイチは私から手を外し自身の片腕を握りしめながら、その手に噛みついて朱い顔から汗を、ぽたりと垂らす。目だけで、その光景を一瞥

して再度、瞼を瞑り集中した。どくりつと勢いのよい液体の塊が私の口内に広がった。

「んう……」

ごくり。

無機物の時とは違い私を押し付けなかったリイチに感心しながら喉を鳴らす。出たては少しお米の、とぎ汁のような穀物の風味と似ていて奥から生物の苦味や生臭さを感じた。

「……ふう……リイチ、次は」

粘着いた液を飲み込んで垂れた唾液と白濁が混ざり薄まったモノが付いた竿を軽く舐めながら三回目は手と口、どちらが良いかと訊こうとして。

「ややや！ やっぱ、おっぱいやろ！ その巨乳、使わん手はないし！」

「!?」

☆☆☆間☆☆☆

五、 【日が傾いて】概念えっち、オナサポ

昔は賑わっていた大きな販売店は風化し、ある程度、窓ガラスは残ってはい
るが割れていたりヒビが入っていたりと、中に入ってもあった筈の物品は、ほ
ぼ無くなっていた。そんな中を、リイチは歩き砂利や塵屑が潰れる。

「ファムアさんを裸のままにするのは……」

目の前には服が剥がされたマネキンが転がっており、その一つを持ち上げて彼は顔を顰めた。埃をかぶったマネキンに息を吹きかけ塵を手で払う。私は小さなホワイトボードの中に入って浮かんだまま、その光景を眺める。リイチはマネキンの膨らみだけがある胸元を見つめて顔を上げると辺りを見回した。柱に張り付いている古くなった案内板で何かを調べたのか歩き出す。程なくしてカーテンの販売場に辿り着いた。

「ああ、良かった……服とは違って残ってそうな気がしたんだ」

そこには少し古ぼけているが埃をかぶった色々な色合いのカーテンがあり幾つかをカートに入れると今度は裁縫の販売場に行き物を選ぶ。裁縫場は少々荒れてはいたが出来合いの物が無くなっているばかりで元手に関しては手が付けられていない様子だった。もしかしたら完全に残っている服がなくなれば、こちら側も駆逐されるかもしれない。鍵が締まる店の裏側に行くとリイチは窓を

開けて空気を入れ替え裁縫用の本を開き中を読む。

「初心者だから最初は上手くいかないと思いますが……布はあるし、それっぽい物は作れると思います」

そうホワイトボードに向けて彼は言い。先ずは、カーテンの内側の白レースで何かを作り始める。一時程して出来上がったのは白いレースの中が透けるショーツだった。まさか下着から作り始めるとは思わず私は驚いた。それをマネキンに履かせると彼は首を傾げる。

「……結べるようにするべきだったか……下がってくる……」

マネキンから脱がすと再度作り今度は左右、紐結びにして紐パンを作り上げた。

☆☆☆間☆☆☆

「んあ……きもち……っ」

何かなんだか。寝台にてマネキンに入った私を横にしたリイチは、そのお腹部分に滾ったモノを当て身体を揺すっている。夜、共に寄り添って眠りにつきはするが彼が敢えて裸でいるのは初めての事だった。

「ファムア……っ」

びくんと腰を跳ねて勃起した先っぱから液体が零れ落ちた。ドロドロとした白濁。彼のモノが小さく跳ねる度にマネキンの腹の上へと白が広がっていく。上気した顔で、じつとこちらを見つめるリイチに鈍く動く手を伸ばし頬を撫でる。撫でれば彼は答えるように顔を擦り付けた。

——……色っばい……リイチの、こんな姿、見ちゃって良いのかしら……

「……受け入れてくれて、ありがとう」

リイチが目を細く開け緩まった表情を見せる。

受け入れるとは、何の事だろう。リイチがする事で私を含めてくれるなら何だって嬉しい。

——…もしかして……

鈍い両手で、リイチを撫でながら思案する。

——…見られるのが好きなのかな……？

そう考えると何だか無い心臓が、ときどきする気がした。そんな秘密を私が知ってしまうなんて、なんて役得なのだろうか。

「ファムア……」

リイチが口元に唇を押し当てた。柔らかな唇。その感触を永遠に知る事は無いだろう。そこだけ惜しいと思う感情はあるが十分、幸せだ。私は固い自分の唇を彼に当てて、その幸福に応えたのだった。

それからのリイチは時間が出来るとマネキンに入った私と疑似の交わり事をした。何度か繰り返し返していく内に、リイチが発散している最中に彼の身に魂を入れ込むと温かい感覚が、ちょっと違って心地良い事に気が付き。

「僕に入りながら……」

ホワイトボードには最近、調子に乗り出した私の文面が書いてある。
『リイチの中に半分入りながら道具を動かしたいです』

リイチの喉が、ごくりと鳴った。

「よ、よろしくお願いしたいと思います……」

私の緊張と同じく、リイチも緊張気味に丁寧な言葉を返して、チラリと用意されたスライムで作られた手作り生処理器具を見る。筒状のそれはリイチが幾つか作った内の一つだ。マネキンの中に女性器の膣として取りつけたかったらしいが傷を付け穴を空けるのに、どうしても抵抗があるらしく作ったは良いが使われずに隠された作品だ。

痛みも何もないし気にせず穴を空けても大丈夫なのだが、リイチとしては私に傷を付ける気分になるらしい。今も定期的に外に遊びに行く時にマネキンを横抱きにして連れて行ってくれるが魔物が出るのだ。いざとなったら動くマネキンを囷にしてほしい所。助けようなんて、しないでほしい。

「あ……わ、わあ……」

筒状の生処理器具に花の香りのする液体を、たっぷり入れて浮かばしリイチ

の立派なモノにかぶせてみる。ぬぷぬぷと音を立てて、それは入れ込み、リイチの大事な部分を包み込んだ。

「フア、ムア……」

瞼を睨り汗を滲ませ悩ましげに眉を寄せる、リイチ。そんな彼の一部に入り込みながら私は上下に道具を動かした。筒の形が上、下と動く度に、ぐにぐにと変わる。リイチは寝台の毛布を両手で握りながら胸を反らし呼吸を繰り返す。

「ふ……っ、あ、あ……っ」

リイチの褐色の肌が火照り、ほんのり色味が変わる。肌から、ぷつぷつと浮かび上がる汗。その一粒一粒を認識しては舐めれない事に残念な気持ちになった。頼んだら舌のようなモノを、リイチは作ってくれるだろうか。気持ち、リイチの頬に口付けをしながら道具を何度も浮かばせて下に擦り付けて浮かばせて擦り付けてを繰り返し、びくびくと、うごめく彼のモノを眺める。

「ん ああ あっ♡」

リイチの顎が上向き、道具の中に白い液体が吐き出されるのを見つめながら、ゆっくりと動かす速度を落としていく。

「ひ、あ♡ あ……♡」

出きつたのか、リイチは寝台に背中を沈め薄く開いた瞳は視点が合わず、ぼーっとしていた。私は道具を外すと近くのホワイトボードに入り込み文字を書いて浮かび上がって聞いてみた。

『ダメだった？』

「……す、すごく、良い……っ」

視線が合ったかと思うと汗を垂らしながらリイチは微笑み、そう言葉を返した。

『良かった！ それで相談なんだけれど』

安堵した私は楽しくなって、リイチに新しい提案をする。舌を作って欲しい。そうお願いすれば即答で、リイチは承諾してくれた。

続きはDLストアがるまにさんにて発売！
よろしくお願いいたします。

試し読み【死して概念になり世界の平穩を見届けた先で

発行日 2021 年 10 月 8 日

著者 意馬心猿

<https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
